特集3 商・材・研・究

PDAソリューション

企業ネットに浸透するPDA VoIP端末としても注目集まる

「企業ネット」の概念が広がりを見せ、モバイル/ワイヤレス環境での活用が必須となってきた現在、企業システムの一環として用いる「PDA」(携帯情報端末、Parsonal Digital Asistants)が注目を集めている。

従来、PDAはビジネスマンが自分のスケジュール、アドレス帳を管理するPIM機能メーンの「電子手帳」としての利用に留まってきたが、携帯電話、PHS、無線LAN、Bluetoothなどを利用し、ワイヤレス環境で利用できるようになってきたことから、「ネットワーク端末」として一般企業に確実に浸透し始めている。これまで固定系のみで完結していた企業ネットワークの概念が拡大し、モバイル環境まで包含するようになってきた現在、PDAは比較的安価に入手できる高性能な企業内個人端末としての役割が期待されるようになってきた。

そこで、PDAシステムを企業向けに「商材」として提案するとき、大きくわけて①社内情報システムと連動、②音声系端末として活用、③特定業務用端末として使用の3つのパターンがあると考えられることから、それぞれのパターンでの企業ネットワーク提案上のポイントを整理してみた。

PDAは、基本的にPCの機能の一部を手のひらに収まる筐体につめこんだデバイスと考えられがちである。NECソリューションズのコマーシャルプロダクト事業部、成澤祥治グループマネージャーは「ノートPC、PDA、携帯電話という機器があり、それぞれ違うものとして、互いを補完しあうのが理想。PCの業務をPDAで実行したり、その逆をやろうとすれば無理がでる。まったく新しい市場で企業にとって何ができるか説明できるかがPDA提案の要になる」という。

現在、PDAはOSごとに分けて、Pocket PC系、パーム系、ザウルス、その他に分類される。Pocket PCは、マイクロソフトのWindows CEをベースにしたOS。Palm OSは、米国で高いシェアを誇っており、カスタマイズが容易な点が特にコンシューマーに評価されている。シャープが展開するザウルスは、国内で一世を風靡した電子手帳の流れを汲んでおり、企業向けにも古くから対応している。そのほかとしては、オープンソースのリナックス、Javaとの親和性が高い英タオ社のElateなどに対応したPDAがある。

ネットワーク接続は当たり前

PDAをネットワークの一環として活用する際、通信環境は必須になる。従来はPDAとPCをクレードルと呼ばれるアダプターを介してシリアル接続する方式が一般的だったが、最近はワイヤレス接続の比重が高まっている。

その中でもPHSは、DDIポケットが定額料金による使い放題メニューを採り入れたことから、企業向けとしても注目を集めている。32k～128kbpsでデータ通信でき、各社からCFカード型、PCカード型のPHSユニットが多く発売されているほか、回線卸によるMVNO(Mobile Virtual Network Operator)にも数社が参入し独自のサービスを展開している。

携帯電話による接続は、端末とシリアル接続するほか、カード型も用意されている。無線LAN、Bluetoothについては、CFカード型、PCカード型のアダプターで接続するほか、PDA本体にユニットが内蔵されたタイプもいくつか発売されている。

SFA連携が市場的に最も有望

では、具体的な提案手法として、先にあげた3つを詳しく見てみる。

①社内情報システムと連動

PDAの市場として最も大きいと目されているのが、SFAやグループウエアといった社内情報システムとの連動だ。東芝モバイルコミュニケーション社の江夏英仁PDA部長は「PDAの本命は一般企業の活用にある。ノートPCを使いモバイル環境を実現してきたユーザー企業がPDAに注目し始めている」と現在の市場を分析する。

東芝では、ある人材派遣会社向けに、外回りの営業社員4000人分のPDAを納入した。1日に40、50件を訪問する、しかも女性の多い営業職においては、重量が重く、バッテリーライフの短いノートPCは不向きだった。そこでPHSを用いて社内のSFAシステムとPDAを連携するシステムを構築した。後付けのバッテリーパックによって、40回以上の操作が可能になった点が導入のポイントだという。

京セラの「PocketCosmo(ポケットコスモ)」は、Javaとの親和性を高めたことによって、企業システムとの連携に重点を置いたという。通信機器事業本部マーケティング責任者の木村一氏は「Javaで記述されたクライアントソフトをPDAに搭載することによって、企業内に設置されたサーバーとの連携がスムーズになる。社内システムにあるソリューションの末端部分に通信を使ってPDAをつなげることで、有効に活用できるようになる」という。

ソフトホン搭載で広がる可能性

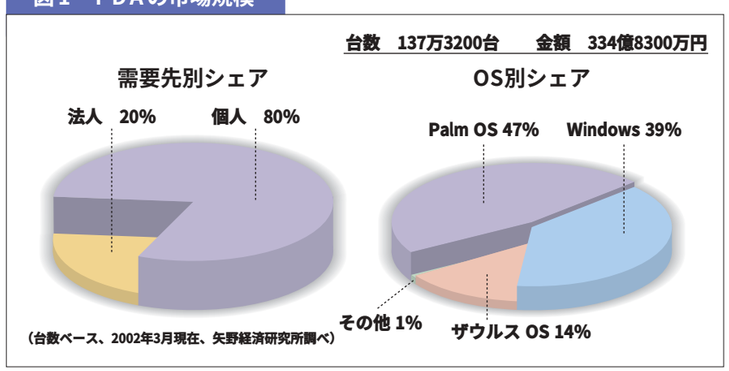
②音声端末として利用

PDAブレイクの起爆剤として最近特に注目を集めてきているのがVoIPなど音声系の活用。IP電話専用の電話番号「050」が認められたことを受け、IP電話の端末としてPDAを利用しようという動きが活発になっている。

カシオ計算機では「DT-5100」にSIP対応のソフトホンを標準で搭載し、音声端末としての需要も掘り起こす戦略だ。モバイル国内営業統括部の木村厚氏は「すでに引き合いが何件かきている。例えば、ホームセンターなどの大型店舗で店頭に立つスタッフにPDAを持たせ、従来の構内PHSとハンディターミナルの機能を合わせ持った端末として、呼び出しをかけ在庫を確認するといった使い方がある」と語る。

東芝モバイルコミュニケーション社PDA部の土肥香織主務は「PDAを音声だけの利用目的で使うことはないでしょう。イヤホンを使って電話をしながら、画面はほかのアプリケ

図1 PDAの市場規模



Bluetooth
ブルートゥース。短距離に特化した無線伝送方式の規格。周波数帯は無線LANと同様の2.45GHz帯を利用し、データ伝送速度は1Mbps。有効距離は10m程度だが、追加増幅器を使えば約100mまで延長できる

SIP
Session Initiation Protocol:IPネットワーク上で電話の呼設定を実現するためのピアツーピア型のプロトコル。インターネット/WWWとの親和性が高く、テキストベースのため、インプリ/デバックが容易といった特徴があげられる